

2つの教職関連科目を担当して思うこと

松尾 徹

今年度2つの教職関連科目を初めて担当した、1つは夏に行われる集中講座「教育と人間」の中で、「教員に必要な振り返りとは」と題して、体験的学習サイクルに基づく組織的かつ効果的な振り返りの方法とその必要性を講義とワークショップ形式で行った。この集中講座は教職に興味を持つ1年生を対象に行われるものである。2つ目は秋学期に開講される教職実践演習で、教育実習を終えた4年生が受講する。受講生はこの科目を通して、教職科目履修を通じた学びと教育実習等で得られた教科指導力や生徒指導力の実践と統合を図ることが目標とされる。それゆえ、この科目は教職科目の集大成と位置付けられる科目である。授業内容は実際の教育現場を想定した教育課題をロールプレイ・討論を通して深く学ぶようになっている。

両方の授業の最初に受講生に「教員に必要なこととは何か」を話しあって模造紙にまとめて発表する活動を行った。「教員に必要な振り返りとは」を受講している一年生はどちらかというと英語に関する知識、教える技術に関する事柄が多く挙げられていた。一方で教職実践演習を受講している学生の多くが生徒に関する事柄が中心になっていた。例えば、生徒を理解すること、生徒の気持ち、学習過程に寄り添うことなどがどのグループにも共通して見られた。もちろん、教職課程をまだ履修していない1年生と教職課程の最後の授業を受講している学生とは全く違うということはわかっているが、それでも教育実習を通して受講生の視点が教えること自体から生徒を理解することに意識が向いていることは確かであると感じた。英語教授法の1つにサイレントウェイというアプローチがあるが、この教授法の中心的な考えになっているのが **Teaching is subordinated to learning** (教えることは学習に服従する)である。つまり学習者がどのように学習するかを知ることなしには上手に教えることができないという考え方である。受講生のみんなが生徒自身またその生徒の学習過程を理解する大切さを理解しているようで頼もしく感じた。

初めて2つの教職科目を担当して再確認させられたことがもう一つある。それは教職課程を全て終えた学生に身につけて欲しいことは何かということである。もちろん、英語教員としての英語の専門知識、技術、生徒を理解する態度、技術、コミュニケーション能力、人権意識など挙げるとキリがないが、一つ私が大切にしたいと思ったことは受講生それぞれが自分なりの「教師としての軸」を持つことだと思った。具体的に言えば自分は教師として何を大切にしているのか、学習者をどのような存在だと見ているのか、自分は学習者に何を伝えたいのか、どのように接したいのか、その理由はなぜかなどに自分なりの具体的な答え

を持てるようになって欲しいと改めて感じた。来年度も教職を履修している受講生が自分
なりの教師としての軸を形成する手助けをしていきたい。

松尾 徹 (まつお とおる 准教授/教員養成センター)
